

No.1 <sup>にじゅうござんまいしき</sup>二十五三昧私記 1巻 鎌倉～南北朝時代（14世紀） 園城寺（法明院）蔵



巻頭



巻末

比叡山延暦寺の僧で、日本の浄土教の祖とされる恵心僧都源信（えしんそうずげんしん 942-1017）などが始めた「二十五三昧会」（にじゅうござんまいえ）のために作られた講式（プログラム）の写本です。「二十五三昧会」とは、寛和（かんな）2年（986）に、25人の僧が集まって結成された念仏結社で、毎月15日に25人が集まって念仏を唱え、極楽往生（ごくらくおうじょう）を願いました。その時に使われる講式（プログラム）として源信が作ったとされるのがこの「二十五三昧私記」です。

本巻の特徴として以下の3つが挙げられます。

①本文の内容について、現存最古の可能性がある

巻末の奥書にある「暹仁」（せんにん）という僧は、平安時代後期（12世紀中頃）の醍醐寺の僧と考えられます（醍醐寺雑事記（醍醐雑事記）巻第2に名前が載る）。つまり、本書は14世紀に写されたものではありませんが、底本（ていほん 書き写す時に用いる原本）は12世紀のものと考えられることから、本文の内容は12世紀当時のものといえます。もしそうであるならば、源信がこの講式を作った以降では、最も古い内容を表している可能性があり（これまでの最古は鎌倉時代）、大変貴重です。

②天台系寺院（そもそも最初にこの講式を作った源信が比叡山延暦寺の僧）で初めて見つかった

これまでに確認されている、中世に遡る古い写本は、ほぼ全て真言系寺院に所蔵されています。その中で本書は天台系寺院で見つかったものとして初めてのものです。

③内容が一般的に知られているものとは異なる

そもそも、現在流布している『二十五三昧私記（式）』はそれぞれ内容が少しずつ異なっており、源信が最初に作った時の原形を推定することは大変難しいといわれています。特にこれまで見つかった古い作例はほぼ全て真言系寺院に伝わっており、その内容も独自に改変されていると先行研究で指摘されています。その中で、本書は12世紀当時の内容をそのまま写したものと考えられ、源信が作った原形を考えるにあたって大変重要な史料といえます。

No.2 <sup>にじゅうごさんまいしき</sup>二十五三昧私記 1巻 享徳2年（1453） 園城寺（法明院）蔵



卷頭



卷末

No.1 のあとに見つかった別本です。残念ながら冒頭が失われていますが、その代わりに奥書に書写年が記されており、享徳2年に写されたことがわかります。No.1 とは内容が異なり、一般的に知られているものに近いといえます。天台系寺院で見つかった2本目です。

No.3 <sup>じもんりゅうひみつぎきしゅう</sup>寺門流秘密儀記集 16巻 鎌倉時代（13～14世紀） 園城寺（法明院）蔵



卷頭

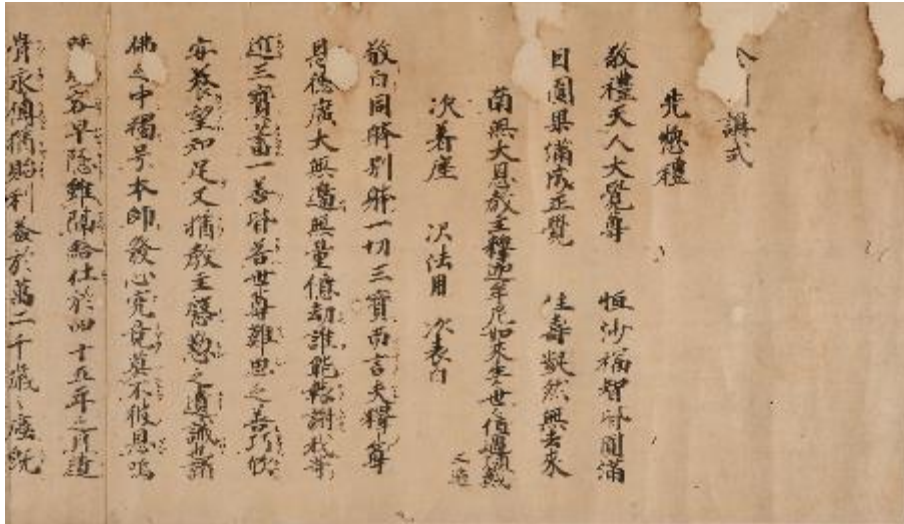


奥書

「寺門（じもん）」とは園城寺のことをいいます（比叡山延暦寺は「山門（さんもん）」）。16巻から成る本セットは、その寺門派内で継承されてきた、密教（みつきょう）の儀軌（ぎき 密教儀礼の解説書）集です。最も古い成立のもので長保（ちょうほ）4年（1002）の年記があり、その後、鎌倉時代頃にある程度がまとまったものと思われます。これまで寺門側でこのような儀軌集が作られていたことは確認されておらず、今後より詳細に検討する必要があります。



No.4 舍利講式 1巻 室町時代（15世紀） 園城寺（法明院）蔵

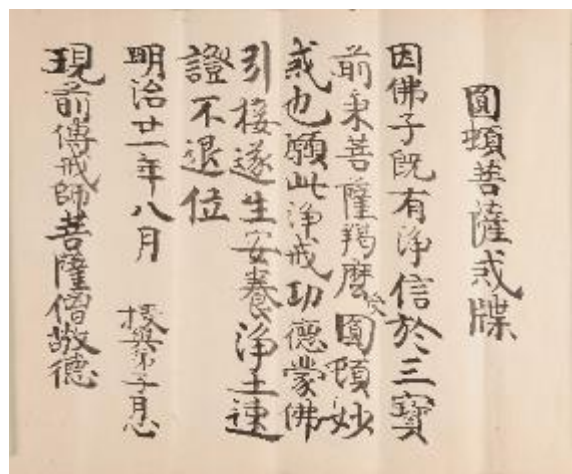


平安時代末から鎌倉時代初にかけて奈良で活躍した解脱房貞慶(げだつぼうじょうけい 1155-1213)による舍利講式です。貞慶は熱心に仏舍利(ぶつしゃり 釈迦の遺骨)を信仰しており、仏舍利を供養する法要で用いる講式を作成しました。本書は奥書などはありませんが、室町時代に書写されたものと思われる。

No.5 フェノロサ、ビゲロー関係史料 一括 明治時代（19世紀） 園城寺（法明院）蔵



フェノロサ授戒表白



ビゲロー円頓菩薩戒牒

明治時代に来日したアーネスト・F・フェノロサ(1853-1908)とウィリアム・S・ビゲロー(1850-1926)は、日本美術に傾倒し、日本美術の復興に努めました。彼らは、当時法明院住職であった桜井敬徳(さくらいけいとく 1834-1889)と深く親交を結んでおり、東京の町田久成(東京国立博物館初代館長、後に園城寺光浄院住職)邸にて敬徳より受戒(じゅかい)しました。左はフェノロサに戒を受けるときに、敬徳が述べた表白文(ひょうびやくもん なぜその法要をするのかということをもつ菩薩に対して述べたもの)であり、右はビゲローの受戒の証明書として渡される戒牒(かいちょう)と呼ばれるものです。